

予算額

13,289,600 円

トップアスリートによる巡回指導

巡回指導先団体総数	8 団体			
巡回指導先団体内訳	総合型クラブ	スポーツ少年団	学校	その他
	3 団体	3 団体	1 団体	1 団体

トップアスリート総数	2 名			
トップアスリートの内訳 (大会出場別)	オリンピック	国際大会	全国大会	その他
	1 名	名	1 名	名

アシスタントコーチ総数	2 名
-------------	-----

指導種目

サッカー、陸上

◆効果をもとめるための工夫や取組など

- ・ 1ヶ月に1回、指導法や運営方法について定期的に研修や事前打ち合わせを行い、常に質の高い指導に努めた。
- ・ トップアスリート、アシスタントコーチと巡回先指導者との事前打ち合わせや中間研修会議など持ち、巡回指導と日常の指導が効果的に連動するようにした。
- ・ 総合型クラブでの教室については、事業終了後も継続できるように巡回先総合型クラブの指導員には指導法を学べるように配慮した。

◆成果と課題

〔成果〕

- ・ 短距離やハードル、走り幅跳びなど専門競技に取り組んでいる中学生は、将来の目標となりうる方に指導してもらうことは、その後の練習において生徒達のやる気を引き出すためのよいきっかけとなった。
- ・ 継続的に行うことで、子どもの中には競技上の技術のみならず、気持ちの面での変化をも見受けられた。
- ・ トップアスリート自身に練習内容を考え、指導してもらうことで普段指導している教室の指導者への指導知識としてもより内容となった。
- ・ 中西選手の教室においては子どもも保護者も普段は見ることのできない陸上用の義足を目にすることで、障がい者スポーツへの関心へとつながったことも感じられる。
- ・ 中西選手の陸上教室において、選手自身が目標としているパラリンピック前に行われた今回の教室は選手自身の知名度が上がったことで、選手を応援する方が増えたこともトップアスリート自身により影響だったと考えられる。
- ・ トップアスリートの高いレベルでの競技経験を子どもたちに語りかける時間をつくるなどをして子どもたちの夢へのチャレンジ精神を培うことができた。
- ・ 巡回指導による新たな教室の創設やトップアスリートのネームバリューによる会員増などが見られた。
- ・ 専門外が指導しているスポ少や部活動では専門的な指導は子どもたちにとって刺激的であった。
- ・ 巡回指導の広報により各総合型クラブの知名度アップにつながった。
- ・ 現役トップアスリートにとっては自分の競技力アップを図る資金を作ることができた。

〔課題〕

<ul style="list-style-type: none"> ・ トップアスリート自身のトレーニングなどとの時間調整が難しい。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 風邪などの流行りやすい時期には教室に集まる子どもの数も激減してしまった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段陸上教室を行っていない教室では、陸上用の道具の確保が難しかったり、数が足りないことがしばしばあった。

地域課題解決に向けた取組

	取組の名称	放課後児童クラブへの指導者派遣による「子どもの体力向上事業」				
	趣旨・目的	過疎化高齢化の進む野津原地区の3つの小学校は児童数も少なく、放課後児童クラブの設置は困難であり、学校修了後の子どもたちを見守る体制は厳しく、また、遠距離によりスポーツ少年団などへの参加が難しく加入率は低かった。そこで、小学校放課後児童クラブNクラブの指導者を派遣し、子どもの見守りと球技や運動遊びなどスポーツ指導を行い、子どもの運動機会を保障した。また、小学生陸上大会の中で、指導者としや保護者を対象とした「子どもの体力向上シンポジウム」を開催し、指導者の質の向上や保護者の子どもの運動参加への意識の向上を図った。				
	内容	2校の小学校の放課後児童クラブに指導者を派遣し見守りと運動遊びの啓発を行った。				
1	対象者	小学生・指導者・保護者	参加人数	95	実施回数	80
	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校コーディネーターと児童クラブ指導者との連携を図り、運動遊びなどの情報交換を行った。 				
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校の放課後児童クラブへNクラブの指導者を派遣し、子どもの見守りと同時にスポーツ指導を行うことにより、過疎化の進む小規模校でも運動に関する先生の高いスポーツ指導者を受けの機会をつくらうことができた。 ・ 子どもの体力向上シンポジウムを開催し、小学生を持つ保護者へ運動の必要性を訴えることができ、子どもたちの今後の運動実施に繋がった。これらの取組を通して野津原地区の子育て環境の向上を図られた。 				
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1校あたりの子どもの数が少なく、体験できるスポーツ種目が限られた。 				

	取組の名称	健康運動教室の出前講座&送迎付き健康教室の開催				
	趣旨・目的	野津原地区の高齢化率は年々上昇し、独居老人の見守りなどの問題が出てきている。そこで、健康教室の出前講座の開催と送迎付きの健康教室の開催により、高齢者の健康増進を図るとともに引きこもりや孤独死などの問題を解決する。				
	内容	公共の交通の便が少ない高齢者を対象に送迎付きの健康教室と出前健康教室を行った。				
	対象者	60歳以上の高齢者	参加人数	57	実施回数	52
2	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地区の敬老会や自治委員さんと連携して送迎&出前教室の広報を行い、全戸の高齢者に活動内容を伝えることができた。 				
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 参加した高齢者は健康増進はもちろんであるが、月数回、定期的に気の合う仲間とのコミュニケーションを楽しんでいた。 ・ 交通の便が少ない過疎地に住む高齢者については送迎を行うことにより、参加意欲が高まったようである。 ・ 出前講座及び送迎付き教室を開設することにより、地域社会と高齢者のネットワークは築くことができた。 				
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 送迎人数の制限や指導者の確保が難しく出前教室の開催場所の制限など課題も多く残った。 				

	取組の名称	夢あふれる野津原フォーラムの開催			
	趣旨・目的	合併後、地域住民で野津原地区の未来について考える機会は無で、地域づくりは行政頼みが現状である。そこで地区内NPO団体、自治区役員が中心となり野津原の未来を考えるフォーラムを開催し、多くの地域住民が集い事前に行ったアンケートをもとに地域づくりについて意見を出し合い、多世代が集う総合型クラブを核とし、スポーツを通して健康や子育て問題を解決し、住んで幸せな夢のある野津原づくりに向け第一歩を踏み出す。			
	内容	総合型クラブを核とした夢あふれる町の将来を語り合うフォーラムを開催した。			
	対象者	野津原地区全住民	参加人数／回	150名	実施回数 1回
3	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ チラシの内容に地域情報のコーナーも設け地域づくりの機運を高めた。 			
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティづくりの著名な講師の招聘や事前に住民を対象にアンケート調査を行ったり、自治委員を通して全戸にチラシ配布を行うことにより、多くの住民に地域づくりについて興味を持ってもらうことができた。 ・ 当日フォーラムに参加することにより、住民一人ひとりが自分の住む地域の未来について考えることができ、総合型クラブを核としたスポーツコミュニティの形成の実現を現実的問題として考えてもらうことができた。このことは、今後、住民が地域づくり、クラブづくりに自主的に参加し、夢あふれる野津原づくりに繋がるものと確信した。 			
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 著名な講師の招聘を生かせず広報の弱さにより、参加人数が少なかった。 ・ 実践につながる内容が少なく、今後は現実的な形を決定するなどが必要である。 			

小学校体育活動支援

派遣先学校総数	4 校
コーディネーター総数	10 名

◆効果を高めるための工夫や取組など

・ 1ヶ月に1回程度の割合で全コーディネーターが集まり研修会を開き意見交換等で指導向上を図った。
・ 小学校側代表者との打ち合わせを密にし、常にニーズをつかみ効果的な関わり方を模索した。
・ 各小学校ごとに中心的コーディネーターを配置し、専門的な種目の場合は専門コーディネーターを巡回指導で回ってもらった。
・ 昼休み、放課後の時間を使ってコーディネーターの企画による運動遊びタイムを設定し、子どもの体力向上を図った。

◆成果と課題

〔成果〕

・ より専門的な指導を行うことにより、子どもの運動意欲が高まった。
・ 担任の先生との連携で効果的な指導を行うことができた。支援を要する子どもへの個別の指導や見守りができた。
・ 次の事業や体育的行事での事前準備が入念に行うことができ、より効果的な指導ができた。
・ 見本の演技や技術を見せることができ、視覚による指導が取り入れられた。
・ 見守りの目が増え、危機管理を含め安全面での向上が見られた。

〔課題〕

・ 1時間目と5時間目の授業がある場合などのコーディネーターを無謝金で時間を拘束してしまった。
・ 平日の時間帯に指導できる若手指導者の確保が難しかった。
・ 運動が専門の担任や運動が苦手な担任など、そのタイプによって関わり方を柔軟に変えていけるコーディネーターの資質が必要である。
・ 担任とコーディネーターの役割や指導領域の明確化と学校現場における地位の認定が求められる。

本事業全体の成果と課題

〔成果〕

- ・ 短距離やハードル、走り幅跳びなど専門競技に取り組んでいる中学生は将来の目標となりうる方に指導してもらうことは、その後の練習において生徒たちのやる気を引き出すためのよいきっかけとなった。
- ・ 継続的に行うことで、子どもの中には競技上の技術のみならず、気持ちの面での変化も見受けられた。
- ・ トップアスリート自身に練習内容を考え、指導してもらうことで普段指導している教室の指導者への指導知識としてもより内容となった。
- ・ 中西選手の教室においては、子どもも保護者も普段は見ることのできない、陸上用の義足を目にすることで、障がい者スポーツへの関心へとつながったことも感じられる。
- ・ 中西選手の陸上教室において、選手自身が目標としているパラリンピック前に行われた今回の教室は選手自身の知名度が上がったことで、選手を応援する方が増えたこともトップアスリート自身により影響だったと考えられる。
- ・ トップアスリートの高いレベルでの競技経験を子どもたちに語りかける時間をつくるなどをして、子どもたちの夢へのチャレンジ精神を培うことができた。
- ・ 巡回指導による新たな教室の創設やトップアスリートのネームバリューによる会員増などが見られた。
- ・ 専門外が指導しているスポーツ少年団や運動部活動では専門的な指導は子どもたちにとって刺激的であった。
- ・ 巡回指導の広報により、各総合型クラブの知名度アップにつながった。
- ・ 現役トップアスリートにとっては自分の競技力アップを図る資金をつくることができた。

〔課題〕

- ・ トップアスリート自身のトレーニングなどとの時間調整が難しい。
- ・ 風邪などの流行やすい時期には教室に集まる子どもの数も激減してしまった。
- ・ 普段陸上教室をおこなっていない教室では、陸上用の道具の確保が難しかったり、数が足りないことがしばしばあった。
- ・ この事業を通して新たに運動を始めた高齢者や子どもたちが増えNクラブの会員増につながった。
- ・ すべての活動の人材確保については慎重に行うため理事長面接、理事会承認等の時間を要した。
- ・ 事業費のクラブ負担や概算払納入までの立替え支出分の負担金の確保が難しかった。